論文審査の要旨及び担当者

報告番号	㊙ 乙 第　　号	氏　名	多　田　光　宏

論文審査担当者　　主　査　精神神経科学　三　村　　將
　　生理学　柚　﨑　通　介　　内科学　鈴　木　則　宏
リハビリテーション医学　里　宇　明　元
学力確認担当者：　　審査委員長：柚﨑　通介
試問日：平成２８年　１月２６日

（論文審査の要旨）

論文題名：Fear Conditioning Induced by Interpersonal Conflicts in Healthy Individuals
（健常者における対人葛藤による恐怖条件付け）

本研究では、対人葛藤刺激を用いた恐怖条件付けの実行可能性の検証を目的として、健常女性を対象にSkin Conductance Response（SCR）を測定し、またSCRと人格特性の相関を検証した。その結果、対人葛藤刺激にて、条件付けならびに消去の成立をみとめ、獲得相ならびに消去相早期におけるSCR振幅差が対人葛藤刺激でのみ、境界性パーソナリティ傾向と有意な相関をみとめた。

審査では、まずSCRの振幅を指標とした理由につき質問がなされた。自律神経反応の指標としてSCRの振幅や積分値を用いるのが一般的であるが、従来の研究で最も採用され、標準的な指標である振幅を用いたと回答された。次にアウトカムとしてのSCRの信頼性について質問がされ、ヒトを対象とした精神生理指標として自律神経反応を評価する際には現時点では最も確立された有用な手法であると回答された。次いで、対人葛藤刺激として用いた台詞音声の作成方法について質問がなされ、事前に被験者とは異なる健常女性が120個の台詞の快・不快を評価し、その値により検査に用いた陰性ならびに陽性台詞の抽出を行ったと回答された。続いて、対象者を健常者とみなせるかについて質問がなされ、性格傾向に多少のばらつきは有するものの、診断基準に基づき精神疾患が存在しないことを確認したと回答された。本研究の対人葛藤刺激が、fearよりもdisgustを惹起している可能性について指摘がなされ、台詞の内容および被験者の認知により、fearよりもdisgust要素が強まる可能性があると回答された。次いでSCRが不快や葛藤を反映しているという証拠につき質問がなされ、連合学習の結果としての俳優画像呈示後のSCR上昇に関しては予測に基づく交感神経系活動を示すものと考えられるが、その活動が真に被験者の不快や葛藤を反映していることを示す直接的な所見はないと回答された。また、聴覚や視覚、言語などのmodalityの差により、SCRの差が生じる可能性につき質問がなされ、SCRに影響を与える要素として、modalityの差に加え、刺激の意味の違いもまた異なる階層の刺激としてSCR惹起に差を有するという仮説を構築したと回答された。本実験系におけるCS+（条件刺激あり）とCS-（条件刺激なし）の定義について確認がなされ、CS+はUS（無条件刺激）を伴う可能性があるCS、CS-はUSを伴わないCSと定義したと回答された。対人葛藤刺激においてCS-でのSCR振幅が高い理由について質問がなされ、CS-にも陽性台詞音声が対呈示され、その音声によるSCR惹起が起こったためと回答された。最後に本研究の結果につき、別の被験者群での再現性の確認、中性台詞音声を対照として用いた方が適切である点、立毛筋収縮や瞳孔径の測定を研究に用いる有用性につき助言がなされ、いずれも今後の研究に組み込んでいきたいと述べられた。

以上のように、本研究は検討すべき課題を残しているものの、対人葛藤を用いた条件付けの実行可能性及び人格傾向の関与の可能性を示した点で有意義な研究であると評価された。